

リベルテール

4月号

MICHEL BAKOUNINE



Libertaire VoL, VII. No. 5

無 政 府 主 義 誌

昭和45年9月4日第3種郵便物認可
昭和51年4月15日発行第75号

リベルテール 定価一〇〇円(郵便料共)

- リベルテール Le Libertaire
- 1976年4月15日発行 VoL, VII No. 5
- 編集兼発行者 三浦精一
- 発行所 東京都練馬区大泉学園町2190
萩原晋太郎方 リベルテールの会

神風精神

ボルノ俳優前野光保が児玉邸に突込んだというニュースは、世界中を驚かせたようだ。ロッキード事件に関連して児玉營士夫のやり方に対する個人的な義憤によるものと思っていれば、その後いろいろと右翼内部の不満とか、前野に司令したものがいるとか、取沙汰されてもいる。

ロッキード事件は、日本の防衛庁や全日空に航空機を売り込むためにロッキード社が多額の金をバラまいたことで、こんなことは資本主義社会では当然のことと考えられる。日本の会社の社用族が費消する多額の交際費も決して無目的ではないことは誰でも知っている。マージャンにしても招待された役人あるいは大会社の者は大抵強いということになっている。金や物を賭けることも単に賞品を出すこともあるだろう。階級社会ではマージャンなどは出世に不可欠なものであるらしい。だからロッキード事件がこんな大問題になったということは、それが国際的で金額が大きい上に児玉というボスが介在したからだろう。物を売って利益を得、利益を得るために手数料も払い、競争相手を蹴落すという、資本主義社会の常道から外れたものではないからだ。安く買った土地を仲間の間でコロがして高く売りつけることも、品物をコロがして利益を得ることが商人の常道であって見れば、これが問題になるのは、一応、政府というものの、政治家というものが国民を代表することになっており、高い物を買って国民の税金を無駄にすることを法によって禁じているからであろう。これは世界中どの国でも同じだが、これを百も承知で売りつけて儲けようとする所に、児玉のような高等乞食の利用があり、ロッキード社の一応の成功がある。

旧陸海軍、現防衛庁を軸として政府や軍需関係産業に顔が利くのが右翼であり、右翼の高等乞食共はその「顔」というもので食っているし、総会屋や暴力組織などにも関連をもっている。右翼仲間には不満があるのは、児玉が昔の右翼の連中ほど金銭に淡泊でなければ、かきかその莫大な金を独占した汚なさか、「仁義を心得えぬ」ことだったのだろうか。あるいは金のために外国商社の手先になる売国奴としてかも知れない。

右翼仲間は上下の階級が軍隊組織にも似て酷しいようだ。ここに前野が司令されて突込んだと言われる理由もあるのだろう。大戦中の神風特攻隊は命令によって出動している。しかし愛国的精神を持った者が志願して特攻隊に入ったとも言われ、この精神が讃美されて来た。前野が純粹にこの精神に共鳴したとすれば、同情も出来ないではないが、相手が児玉では右翼仲間の内ゲバでしかないことになる。左翼の内ゲバも、あるいは神風精神だろうか。

目次

巻頭言 神風精神

1

バクーニンと現代

P・アヴリツチ

2

一波万波

アナーキズムと右翼 李大春 5

三里塚闘争に断固たる支援の手を

秋月 優 6

感想 シライ 7

書評

「筑豊の黒旗」

「何が私をかうさせたか」

大沢正道著

(遊戯と労働の弁証法)

野火 10

海外だより 13

バクーニンと現代革命 (1)

ポール・アヴリッチ

一世紀前、アナキズムは革命運動内の一つの主要な勢力として出現しつつあったが、その主要な主張者、予言者であるバクーニンの名前は、彼が第一インタナショナルのリーダーシップをめぐってあらそったカール・マルクスの名前とおなじくヨーロッパの労働者や急進的なインテリの間でよく知られていた。しかしながら、マルクスと対照的に、バクーニンは反抗の理論家としてよりもむしろ主に行動家として名声をかちえていた。彼は図書館の席にすわり、あらかじめ決定されている革命について研究し、著述する理論家ではなかった。彼は行動に駆られ、抑圧しがたいはつらつさをもって一八四八年の諸蜂起に身を投じ、プロメテウスのような姿が、反抗の潮流とともに、バリからオーストリアやドイツのバリケードへと動いていた。バクーニンのような人間は、「ハリケーンのなかで成長し、晴天よりも暴風のなかでよく円熟する」と、ある同時代人は評言した。

一八四九年のドレスデン反乱の間のバクーニン逮捕は彼の熱病的な革命行動を中断した。彼は次の八年間を牢獄で、そのうちの六年間をツァーリリスト・ロシアのおそ

ろしく陰惨な地下牢で過ごしたが、ついに難局を脱し、判決がシベリア終身刑に減刑されたときには、壊血病のために歯がなくなり、健康はいちいちるしくそこなわれていた。しかし、一八六一年、彼は監視人から脱れ、地球を一周し、その名前を全ヨーロッパの急進的なグループのなかで伝説とし、崇拜の対象するセンセーショナルな冒険旅行へと乗り出した。

歴史上ロマンティックな反逆者として、また、活動家として、バクーニンはマルクスがけつしてたちうちすることができない人格的な魅力を発揮した。ドレスデン蜂起に参加した仲間の一人、作曲家リヒアルト・ワグナーは、「彼については何もかもが巨大で、素朴な豊かさや強さにみちあふれていた」と回想したものである。バクーニンみずからは彼自身の「ファンタスティックなものへの愛、その結末を予見しえない広大な地平を切開する尋常ならざる、未曾有の冒険への愛」について語っている。次いで、これが他人に途方もない夢を喚起し、彼は一八七六年に死ぬときまで、革命的伝統の冒険家や殉教者のなかで特異な位置を占めていた。アレクサンドル・ゲルツェンはバクーニンについて、「この男はありきたりの星の下ではなく、彗星の下で生れたのだ」と言った。バクーニンのあけっぴろげの寛大さと子供じみた狂信、

自由と平等に対する燃えるような情熱、特権と不正に対する激烈な攻撃——これらすべてがその時代のリバタリアンのなサークルのなかで彼にとつともない人間的な魅力をもたらしただけである。

しかし、バクーニンは、彼を批判するものがあきることなく指摘していたように、体系的な思想家ではなかった。一度だつて自分がそうであると主張したこともなかった。というのも、彼は自分自身を「マルクスのような哲学者、体系の発明者ではなく」、行動の革命家と考えていたからである。彼は歴史の予想された、もしくはあらかじめ運命を定められたいかなる法則の存在をも認めることを拒否した。彼は社会変化は「客観的な」歴史的諸条件の漸進的な進展に依存するという見解を拒絶した。逆に、彼は、人間がみずからの運命を形成し、人間の生命を抽象的な社会学的公式というプロクルステスの寝台に圧搾することはできない、と信じていた。バクーニンは「どんな理論も、どんなできあいの体系も、いままで執筆されたどんな書物も世界を救済しないであろう」と断言した。「私はどんな体系にも固着しない。私は真の求道者である」。労働者に理論を教えることによってマルクスは万人がすでに身になえている革命的な熱情——「自由への衝動、平等への情熱、反逆という神聖

なる本能」——を庄殺することに成功するにすぎなからう、とバクーニンは言った。バクーニンは、マルクスの「科学的社会主義」とちがひ、彼自身の社会主義は「純粹に本能的」である、と確信した。

だから、ビョートル・クロボトキンが指摘したように、バクーニンの影響は一義的には知的権威のそれというよりもむしろ「精神的人格」のそれであった。彼は驚くほど著述したが、子孫に一冊として完成した書物を残さなかった。彼はその騒々しい生活のために、途中で投げ出され、けつして完了しなかった新しい著作をひっきりなしに始めていた。トマス・マサリックの記述によると、彼の文筆の所産は「断片の寄せ集め」であった。

しかし、彼の著述は、いかに方向不定で非体系的であるにせよ、彼自身の時代と現代のもっとも重大な諸問題のいくつかを説明する洞察のひらめきに富んでいる。本稿が証明しようとしていることは、バクーニンの思想はその人格に劣ることなく永続的な影響を発揮し、その影響はここ数年の間にとりわけ顕著であった、ということである。もし実際にバクーニンの精神が語ったとするなら、それは一九六八年五月のバリの学生街においてであつて、そこではアナキズムの黒旗が他にぬきんでてひるがえされ、ソルボンヌの壁にぎざまれた落書のなかには

「破壊への情熱は創造する情熱である」というバクーニンの有名な宣言が人目をひく位置を占めていた。わが国では、『氷の上の魂』のなかでエルドリッジ・クリーバーはバクーニンとネチャーエフの『革命家の教理問答』への恩義を表明しているが、きわめて興味深いことに、これはバークレーのブラック・パンサーの組織によって最近パンフレットの形で刊行された。社会学者のルイス・コーザーはレジス・ドブレのなかに新バクーニン主義の傾向を検出した。コーザーは賢明にもドブレをバクーニンの狂信的な若い弟子になぞらえて、「アンデスのネチャーエフ」と呼んだ。そして、フランツ・ファノンの影響力のある著書、『地に呪われた者』は、植民地の圧制者を根絶するために下層の深みから生ずる軽べつされ拒絶されたものについてのマニ教的理解をもち、ときとして、バクーニンの著作集からそのまま引用したかのごとく読めるのだ。要するに、新しい世代が自然発生的、非空論的な暴動主義を再発見したとき、バクーニンの教説は彼ら自身のものとなったのである。

二〇世紀にこれほどまでに妥当する——おそらく、バクーニン自身の時代によりもずっと——こととなったこれらの諸思想とは何なのか。なにはともあれ、バクーニンは、マルクスをも例外とすることなく、同時代の誰よ

りも明白に近代革命の真の性格を予見していた。マルクスにとり社会主義革命はよく組織された、階級意識をもつプロレタリアートの登場、つまり、ドイツあるいはイギリスのように高度に工業化された諸国で期待されるものを必要とした。マルクスは農民を建設的な革命行動の能力がもつとも少ない社会階級と考えた。都市スラムのルンペンプロレタリアートとともに農民は暗愚な、原始的な未開人、反革命の防波堤であった。これとは対照的にバクーニンにとり農民とルンペンプロレタリアートはブルジョア文明の頹廃している影響にさらされるところもつとも少なく、反逆への素朴な活力と荒々しい本能を保持していた。彼は、真のプロレタリアートは中産階級の主張と野望によって汚されている熟練した職人や組織された工場労働者のなかにではなく、鎖以外に失なうべき何物をも本当にもたない偉大な「未開の、廃嫡された、無教育の」民衆のなかにある、と言った。だから、マルクスは訓練され、鍛えられた労働階級によって指導される組織的な革命を信じていたのであるが、バクーニンは激昂した都市の暴徒の自然発生的な蜂起、つまり、正義に対する本能的な情熱と報復に対する抑圧しがたい渴望によって駆りたてられる原始的な大衆の反抗と結合した農民暴動に希望をかけていた。バクーニンのモ

デルは一七、一八世紀のラージンやバガチョフの偉大な反抗によって組み立てられた。彼のビジョンはすべてを包括する激変、大衆の真の反乱から成っているのであるが、この大衆のなかには労働階級以外に社会の最も粗野な勢力——ルンペンプロレタリアート、素朴な農民、失業者、アウトロー——を包括し、これらはすべて、自分

たちの貧困と隷従にささえられて生きているものどもと抗争していた。(つづく)

三もししくは四回にわたって掲載する右の論文の原文タイトルは「バクーニンの遺産」である。問題は最終回につける。(J)

一波万波

アナキズムと右翼

李 大 春

ロッキード事件で、米国の死の商人と日本の政治官僚、右翼、企業の一体となった悪業とつるみ合いが、わずかに露呈された。ブルジョア議会議の猿芝居と天皇制の有形無形の暴力によって被い隠されてきた諸々の悪業によって、こんな事は日常茶飯事の事なのである。

そのロッキード事件の黒幕として世間で騒がれている児玉誉士夫は、A級戦犯という肩書を持ち、右翼の大物として、保守政治の舞台裏で暗躍し、常日頃より自民党のゴロツキを集めた青嵐会や、暴力団と密接につるみ合いながら、反人民的言動をほさき策動している。米国兵器商人のセールスの片棒をかつぐとは民族主義が聞いてあ

されるが、右翼の思想的水準、知的水準はすべてこんなものであり、お話しにならない。

ところで、日本のアナキズム運動の中の一部の右翼への墮落を見て、アナキズムの右翼反革命との同一性、あるいは思想的類似性を宣伝する者がいるが、アナキズムは、愚劣な右翼づれと同居するなぞという事は絶対に有りえぬ事であることを、しっかりと確認しておかねばならない。

日本の右翼の大部分は天皇制護持と憲法改正そして反共を旗印としている。彼等は反動支配階級と結託して、公害斗争、一株運動などの人民の革命行動の妨害に暗躍している日大斗争における右翼暴力団の敵対行為は、多くの革命的学生の血を流した事は衆知の事実である。彼等の中には、巧妙な左翼的みせかけをかぶったものもあるが、その思想の根本は、ファシズムへの限らない憧憬

にあり、結局、行きつく所は死神天皇への回帰である。

これらの輩が、おこがましくもアナキズムを口にする事は、許すべからざる事でありこれを許す事は、人民に対する罪悪行為である。笑止千万にも、三島由紀夫のごとき本末転倒の天皇ドレイが、天皇アナキズムなるものをわめき、太宰治のごとき俗物偽善者がマルキストとのたわむれをへて、戦後の零落感の中に、天皇アナキズムなるものを同様にあみだしている。これらのものは、アナキズムとは正反対の反動的たわ言であり、この様な輩の反革的言動をのさばらしてはならない。アナキズムと天皇制とが、同居するなぞという事は絶対にない。アナキズムにとって、天皇および天皇制は元始以来の最も強悪な敵であり、アナキストは、その存在を絶対に許す事は出来ない。天皇アナキズムなぞという事を口にする輩は、またアナキズムを不当に中傷攻撃する輩は、アナキズムの眞の人民的思想性、その偉大な革命的伝統をねじまげ、落しめんとする、にくむべき陰謀者であり、我々はこの様な攻撃に対して断固反撃して行かねばならない。

三里塚闘争に断固たる支援の手を 秋月 優

あらためて言うまでもないが、三里塚農民の闘争は、

これらの人民の生の闘争の中で、自からの反人民性格を暴露したものに、日本共産党の姿がある。彼等は、人民のあらゆる闘争から逃亡し、妨害と中傷をその生きがいとしている。今や、彼等の反革命性は、消しようない悪臭を放っている。彼等は、資本家のマル生攻撃の裏側からの協力者であるし、下部組織である民主商工会は、小商人のゼニ勘定や、乗とりなど、資本主義的悪のタイコもちをしているありさまである。我々は御用左翼や、権力、資本家、天皇制の一体となった反動攻撃に強力な闘争の連帯を構築せねばならない。

あらゆる人民の闘争の場に、アナキストの黒色旗をひるがえそうではないか。

感想 シライ

二月号の故綿引君の手紙が出たのはいいが、相手が高石新ではわかるまい。高石とは平井貞二君であって、始めて綿引君のいう合成労働とか、関西自連の合成除名の説明者として意味が通る。合成を関西自連から脱退させたのは、平井君が「競馬屋」というワシ白井である。自連は組合加盟か規約で関自から脱退しても全自からは脱退していないというのが、合成の解釈だった。思想によって組合の組織を割ったら、労働運動にならないと今でも

きわめて重要な局面をむかえている。敵、権力、公団に鉄塔の破壊、撤去を許す事は、人民を民草なぞとのしり、強奪し搾取して来た極悪人、天皇裕仁を主柱とする日本支配階級、軍国主義者の一層の増上を許す事になる。奴等は公共性だとか「なんとか功名な口車を用い、恫喝し、ある時は猫なで声を用い、無礼千万にも人民の生活の中に土足で踏み込み、農民の所有する神聖なる農地を略奪し、盗みとろうとした。そして、その生贄を天皇に献上し、人民を天皇制軍国主義支配のもとに、総奴隷化する事が、奴等のもくろみなのである。権力、公団は言うまでもなく、これらの周辺で私腹を肥やさんとする右翼ごろつきや、有家無家の投資家、利権屋、土建屋の類に対しても、徹底的な鉄槌を下さなければならぬ。略奪し、搾取する事のみが存在理由である所の国家や、弱い者に食らいつき、その血を吸いより良い階級のし上る事しか考えない人間しか生み出す事出来ない社会、これらの包囲の中で闘う人々に光明をあたえるのは、あたかも、暗夜の燭光のごとく、決起する人民の英雄的闘争の姿、あるいは目からの血をもつてする、行為による伝道の姿である。この意味から、三里塚農民の正義の闘争は、反権力の偉大な星として、我々の頭上に輝くのである。

考えている。が綿引君はその思想的な主張は別にしているべきこと、斗うべきとは斗った。平井君も。綿引君の通夜の部屋で、メノン・クマールの寄せがきが壁面にあるのを見て、あのときこのW・R・Iの平和行進を積極的に支持し、行進第一夜の宿まで提供してくれた。他のアナ連の先生方は、W・R・Iに団体加盟していたが、顔も出さなかった。斗う人間と、イデオロギーを玩ぶ人間との相違である。自由連合主義がアナルコ・サンジカリズムか、そんなことは枝葉末節だ。一生斗った人間の死、立派だったと思う。

書評

筑豊の黒旗

あとがきにも書かれているように、若い同志たちの熱意が結実して立派な本ができた。神戸の共同文庫が発行所になっていることも嬉しい。著者の杉藤二郎君の人物、それはこの本に一貫されてにじみでている。この人物があったからこそ、若い同志たちもその熱意を結集してこの本をつくることができたのだ。向井君の「解説にかえて」は、アナキスト連盟の苦難の途を的確に書いている。運動が登り坂のときは皆がワイワイ騒ぎながらでも何か知ら出来るかも知れない。しかし降り坂の時は血の

出るような同志たちの苦闘も闇の中に消えてゆく。その降り坂の時に杉藤君は筑豊の地に黒旗をなびかせた。そして副島君は世を去り、杉藤君も年老いた。身一つを叩きつける男の熱情が闇の中に消えて、それでいいのかと私は思い続けていた。リベルテールに書いてもらったのも、せめてその熱情の万分の一でも世に知ってもらいたかったからだ。冷静な理性の持主が、何の打算もせず、真一文字に突き進んだこの道筋を、じっと見つめてもらいたい。

リベルテールに連載されたものに加筆訂正が加えられている。読みくらべれば諸君はそこに著者の反省の真実さを知るだろうし、さらに加えられた「思い出すままに」や、「歴史の流れの中で」によって、新鮮な著者の思想に触れることができる。新鮮なというのは決して哲学的な大思想を展開しているという意味ではない。著者はどこまでも有りのままに自分が考えるように行動し、そして自分が考えたままを書いているのである。クロボトキンがこう言ったとか、マルクスの史観がどうかとか、そんなことは何一つ言っていない。アナキスト杉藤が錯雑限らない現実の社会の中で、その現実にあつたか、考えて、ある時は考えるひまもなかったかも知れないが、とにかくにも対処し行動したのだ。そこに方角

式のない解答がある。そこに新鮮なものがある。思想を哲学的に表現するのではない。思想は人柄として形成されていく。その発露を行動の中に、行動の記録の中に汲まねばならない。行動は生れてから成長したその人の環境を反映している。名古屋で生れ、東京で学生生活を送り、関西で新聞記者生活をし、軍隊にも行った杉藤君の中に集大成されたものが、九州で、その九州の中の炭鉱という特異な地域社会を中心に、接触し、交錯し、学習し、適応して、この筑豊の黒旗に結集されているのである。アナキズムはその根底に流れる、一つの貫ぬくものとして存在する。

この一つの貫ぬくものとしてのアナキズムはヨーロッパにせよ、アメリカにせよ、その他の何処においても圧力をはね反す民衆の思想として、表面的な差はあっても、根底において共通のもので、書籍や經典の文句の解釈による「イズム」とはちがう。

だから、この筑豊の黒旗は、単に一人の杉藤君の表現したものであっても、これはアナキズムの日本的な、否アジア的な表現である。インタナショナルな観点に立ち、世界の地理を考え、世界の歴史の中に人類の魂を探ろうとする者は、ここに一つの新鮮なものを見出さずには居られないのである。

私と杉藤君との出会いは、九州を引揚げて上京し、数学館の前の喫茶店「窓」の別室でやっていたアナキズム研究会（リベルテールの会の前身）においてであった。だからこの本に出ているアナキスト連盟大会の写真や寄せ書きは、その以前のもので私がまだ横浜にいた頃のものと思われる。その後、東京に出て神保町のランブルでの連盟の例会に出るようになった。淋れた例会で横倉君が「おれたち老頭が面を出さなきゃ連盟はつぶれるぞ」と言った位だった。それで精を出して出席し、秋山君が提案した大杉の四十年を機として研究会を開くようになったのだ。そして杉藤君との交流も初まったのだ。交流の日は浅い。しかし杉藤君の中に一つの貫ぬくものとしてのアナキズム、彼の人柄の中に溶けこんで、溢れ出るアナキズム、それがこの本をつくり上げるものとなったことを、心の底から喜ばずにはいられない。どうかこの本が、皆に再読、三読されますように。（三浦精一）

何が私をかうさせたか

増補決定版・黒色戦線刊
597頁 定価二、四〇〇円

七二年の第一刷に次ぐ第二刷決定版だ。歌集、写真、当時の朝鮮黒色運動関係誌紙が収録されている。文子の

房内での自殺が一九二六年七月二十七日だと聞くと、ちょっとした感慨に捕われる。この年はバク死後五〇年に当り、外ではお祭り気分ではなく、何らかの顕彰記念が行われようとしていたのだから：文子は社会変革の意識を持った明晰な女性であった。その意味は彼女なりの論理をもち（参照所有に関する見解本書523頁、天皇観465頁）それが普遍性を獲得していることだ。彼女が何によってこの論理を得たか。それは幸徳と同じく八境遇と読書Vによってであろう。彼女の天皇観は宮下太吉、菅野スガ、内山愚童等と共有するもので、その根は八平等Vである。近代思想は自由と平等と博愛によって、諸民族の生活環境を構成していた封建制を打破した。未完なのはわが日本である。その為文子のような犠牲がでるのだ。所有に関して彼女はスチルネリアンを自称している。首尾一貫性から言うとは存在の因果関係を越えた彼方すなわちニヒルの境にこそ真の幸福、真に人間の求めたものがあるのだ：Vはかえって彼女が批判した老子的な見解であって、西欧思想の文脈では、詩的表現とは見えても意味をなさない。ニヒルはニヒルであってそれ以外の何ものでもないから。むしろ彼女の美点是否定的ではあるが次ぎの一文にある。

「私も初代さんと同じように、別にこれと云う理想を

持つことが出来なかった。けれど私には一つ、初代さんと違った考えがあった。それは、たとひ私達が社会に理想を持たないとしても、私達自身には私達自身の真の仕事と云うものがあり得ると考えたことだ。それが成就しようとしまいと私達の関したことはない。私達はたゞこれがただ真の仕事だと思ふことにすればよい。それがそういう仕事をする事が、私達自身の真の生活である。」(本文39頁)ここではその仕事が何かは言及されていない。それは彼女の自殺と表裏一体をなすものだが今では謎である。しかし判っているのは古代ユダヤのヘロデ王と同じく権力は民衆の家一軒一軒を訪ねて幼児を選びだし殺したように、文子を選び出して虐殺した。それが偶然ではなく計画されたものであったことは、彼女の思想の正しさを傍証してゐるのだ。

(Y記)

野 火

☆誌紙見参☆

八大道貫古今¹⁵ 第11号岩佐作太郎遺稿集刊行会月報。
「大道ハ古今ヲ貫ク」と読むのだろう。勿論大道とはアナキズムのことで、その理念、原則、生き方として古今を通じ人間の歩く道だと解される。岩佐作太郎の題字だが横書きでは左から右へ読みやすく、昔のように(約

三・四〇年前のこと?!)右から左へ読んで意味が判るようになってゐる。布留川信さんの八否定の倫理と論理Vがよい。要旨は岩佐の山賊論をめぐって展開されて居、八日本の自称アナルコ・サンジカリストはどんな問題についても、否定ということばを口にしたからにはいまずぐにでも否定的行動をとらなくてはならないかのよう論理的に考えてゐるようVだと指摘し、八否定的行動がいまずぐとれないなら、たとえ倫理的にも否定的なことを口にするなVということかと反問している。布留川さんは1.行動的否定2.思想的否定を峻別し、1.にテロリズム2.にニヒリズムを当て、また外部否定と内部否定を付して、思想的否定を優位に置いている。そこで岩佐の山賊論は否定の論理(思想的否定)自己内部での否定(即ち否定の倫理)から発したものでアナキストの自由な生命Vからでたものだとする。これは創見だ。また次のように言う。八しかるに理論的な日本のサンジカリストは、ただ単に否定でなければ肯定、肯定でなければ否定と論理的にハッキリ切りはなすことによって、理論と実際、否定と肯定を観念的に対立させて二者択一の立場に立つことを余儀なくされてゐるのであります。しかしこのような観念的論理の中には否定の中に立つ新らしき肯定者として自分自身が不在であります。ここにかから

の主体性を失つた無思想、無責任すなわち資本主義的立場からの客観的論理が成立するのであります。V(傍線筆者)この文脈の中には弁証法についての鋭い理解が含まれ、切り返す刀で日本的サンジカリストがなぎ倒されている。注目したいのは、布留川さんは印刷人として労働の中から体得した言葉で裏打ちしているのだから、その重みを知らない限りこれを冷笑したり無視するのは読者の間違つた自由の行使にしか過ぎないということだ。否定の倫理とは各自の内部で育てられ、資本主義の所産に對し否という立場を確立することだと見た。

ただ不審なのは布留川さん達の闘ってきた歴史こそ純粋にアナルコ・サンジカリズムでありながら、純正アナキズムに拠り、何故八日本のアナルコ・サンジカリストVが非難の対象になるかという事である。これは文化受容に就ての日本の特殊性であつて、生粋の労働者達が反インテリの立場を執らなければならない程、インテリの観念性は救いようがなく、それだけ労働者のニヒルは深いと言えるのだろう。問題は提起されたのだ。解決への道は遠くても試みなくてはなるまい。

八黒連V日本黒色連盟機関誌・創刊号がでた。「無政府主義へ向けて」は昨年9月準備会での結成以来の現状報告と希望を述べてゐる。コラムにリベルテール3月号所

載「日本文化革命」についての誌評がある。引かかるのは八すなわち、大衆が大衆である限り、アナキストが大衆の中に融合していくことはないであろう。アナキストと大衆は別の道を歩まねばならない。Vなおこの文の前半は自分と大衆を明確に区別したいとして、八私にとつて大衆という対象そのものが存在するかどうかわからないのであるが(もし判らないならこのあとの文はでない筈)筆者註)自分は大衆の一人であると思つてゐる人、あるいはあなたは大衆の一人だといわれても、何の抵抗感も反発も持たない人、このような人々を大衆であるといふ私は思つてゐる。V大衆の概念規定が問題だという訳。個人的に言えば私などこういう文章を読むと笑いだすし、嬉しくてたまらない。これを観念論だとケナスまえて、観念界に住むと日常生活で接する諸個人(大衆?)は見ても見えず、聞いても聞えずという次第になるのだ。その味いはそこに生きる人しか判らないが最も現実的な生活人でも何かの事業や予期しない出来事や喜びで有頂天の際には、多少ともこういう心理状態になるだろう。しかしわがアナキズムの視点からすればこれでは困るのだ。コラムの記者はアナキストと大衆は別個の道を歩まねばならないと書いた後八それ故アナキストが大衆を指導しなければならぬという考え方

を私は拒絶する。だから私にとっては大衆が大衆として何を創り出しているか、何を創り出すのか、何を創り出せるのかということは重要な関心があるVと記している。人が何に関心をもつかはその人の自由だとして、私なら次のように理解する。われわれの周囲で「市民」「人民」「大衆」「臣民」「国民」「庶民」「常民」「土民」「平民」「無産階級」「プロレタリアート」等の言葉によって人民衆Vの指標として、それらはいづれもそれぞれ一つの観念体系から出て居り、従って概念規定を求めるのは有効だろう。しかし実在するのはあなたであり、私であり、その妻子眷属、兄弟、朋友その他それこそ諸々の諸個人でこれは無視できない。自分だけは別だと考えるのは勝手だとして、思想集団で囲い込むのは、それだけなら我慢するが、もし大衆という対象V操作の対象に大衆を置くのなら、現代の弊害だけでもう十分だろう。近代人の定言命令は人をもととしてでなく人として扱えと教えている。これに対しサルトルは人々を人々として扱おうのではなく動物として扱おうと告発した。アナキストは人を具体的人として視るのだ。昔、バクとゲルツェンが人民衆の中へVを言いだした時、ロシアの若い人は「言葉だけで具体性がない。民衆の中で何をどうしようというのか？」と反問した。その後クロボ

トキンは人民衆の中へVの運動体験を通して青年に訴うVを提示した。その辺から押さえて行けば、アナキストだけの集団で何をどうするかと論じては夜明けは遠いと自知するだろう。

（付記）だからと言って私の真意はアナキストの集りを拒否するとかどうしようもないという積りはない。それどころかその種の集りでさえ少な過ぎると思っっている。と同時に民衆との接点のない思想集団は砂上の楼閣で内側から腐敗するとか内ゲバや外へ回って嬌激な行動をとるようになる。例示は中浜鉄と古田大次郎達のグループ小作人社、日本無政府共産党の紙上だけのグループ等。アナキスト組織がアナキストだけで純粋化するの、それは外的条件で分断されるとか、異質を許さないほど理想主義にコリ固まる場合で、いづれも健全とは言えないし、自然に反すると思う。（文責はしもと）

望月桂氏の分骨納骨

三月十八日（木）十一時から、川崎のまんが寺（常楽寺）平安朝以来の由緒ある寺に納骨された。その通称の通り、この寺には明治以来の漫画が満ち溢れている。犀川凡太郎（桂さん）の絵にもお目にかかる。信州から令息の晴美さんが遺骨を持って来られた。桂さんの妹さ

んのおしげさん、晴美さんの妹さんとその二人の男児も共に見えた。桂さんのゆかりの古い同志たちが集って、「山寺の鐘」とともに法要焼香の上、明治以来の漫画家たちの筆塚に合葬された。筆塚に合葬されているのは桂さんを合わせて三十一名になる。「東京に来てもお父さんの墓参ができるね」と誰かが晴美さんや、その甥たちに言っていた。（三浦）

まんが寺・川崎市中原区宮内、東急線武蔵小杉駅の南
武線口からバス宮内まわり溝ノ口行、薬師
寺前下車

金子文子の碑

三月二十日「文子碑」の除幕式が百二十名の人々の参加者によって悪名のもとに踏みつけられていた金子文子が、その郷里で人並以上の座をもつことになった。

（三浦）

海外だより

☆ロンドン在のアーサー・モイゼが次のエッセイを送ってきた。長文なので要約する。主題は暴力Vについて

「暴力は西欧のリベラルやリバータリアンにとってアカデミックな主題である。遠い所での暴力で自分が直面しなければ話題にはなるが、警察が警棒を使ったとなるととと良識をもつべきだと（市民の自由のための国民会議）が論議する……強権国家に住む人なら良心に對し与えらるる死刑宣告には死を選ぶ人を問題なく名譽だとする。宗教者なら地上の生命を捧げてもより大きい光榮が待っていると祈りの中で知っているのだろう。しかし国家を拒絶する人々についていえば私は愚かで佻びしい意見を持っている。国家が生命を奪うというのなら、そして生命が私にとって何ものにも代え難いなら、国家が与える武器を執って闘うべきだとするのだ。それで初めて共通の闘いの場に立つことになる。……（市民の自由のための国民会議）の会員・同調者一〇〇人がマンチェスター大学の一室で会合していた。平和主義者や労組の人達だ。そこへ三〇人のファシストがなだれ込み忽ち奴等の活動を始めた。会員の一人はビンでなぐられ顔を18針縫った。64才の婦人は頭に4針の怪我だ。一〇〇人の会員はパニックに陥り報告によると人みな暴力から遁れようと扉の方へ走ったVとある。だが善人は壁の隅へ押し込まれ、ひとしきり暴力をふるわれて国家警察に助けを求め電話した。警察は笑ってとりあわなかった。国民会議

はこんな場合どうすべきかと訴えている。……

私の答はこうだ。生き方として暴力を求めたり、社会的な一解決として暴力を用いてはならない。もし必要なら（一人の時なら）毅然として暴力の場から立去るんだ。だが退りぞくのが不可能な暴力的衝突に巻き込まれたらその時は君の生命を賭けて、君の体力の許す限りとどまって防禦したまえ。

以上

☆甲斐一君から連絡を受けた最近のNEWS

マーチンソースター氏は、目下マリランヨンという左翼の女性政治家と共に行動しているそうです。「彼の発言はアナキズムに近いが、その行動についてはどうもよくわからない」とはフリースペースのB氏の意見です。問う合わせ先は

○/ MARIE RUNYON

ASSEMBLY WOMAN

HARLEM STATE OFFICE BLDG. New York N. Y

フリースペースはプログラムが新しくなって。全権力を民衆へってなわけで「アナキストの映画」や「科学小説とアナキズム」失業者のための職業あっせんの仕事や弁護士を用意しての「法律相談」などの講座が出来ました。温かくなるにつれて屋外の行動も増すでしょう。2月号のリベルタリアン社会主義の経済学（I）興味深

く読みました。こちらではアナルコキャピタリスト!!を名のる連中が現われています。政庁の経済介入がなくなる事で完全な自由市場が形成される。つまり無政府資本主義制度ということです。完全な自由競争は人々を幸福にするというこころしい。また右翼からもアナキズムに接近した。無政府社会において人々全てが利潤を得る事を目とするグループも存在して、これと先のANARCHISTALISTはまた違うという事です。日本ではこのような主張をする人々が出ていますか?

ANARCHO CAPITALISTの著作

AYN RAND (SIGNET出版) から数冊

DAVID FRIDMAN (HAPPY出版)「MACHINERY of

FREEDOM」これは今、僕が読んでる本

新しS ANARCHISM (B氏のナチズム本)

MURRAY BUCKHIN (PAMPARTS PRESS)

「POST-S CAROTY ANARCHISM」

☆フリーダム^{2/21}Vol.37 No.4によると英国アナキスト連合(The Confederation of British Anarchists)が約50名の個人・グループ代表によって結成されたと言う。目的や原則は後から文書にして各国のアナキスト連合に発送するそうだ。前文の要点は「アナキストとして権威、

政府形態、支配者のない社会を目標とする。この目標に至る為、努力する唯一の道は、権威的でない仕方組織を作るのだ。何故ならわれわれの採用する手段が目的を決定するからである。われわれは民衆の創造性や主導性にドグマを設定するのではなく、そうしたものを引きだすのである。信じているのは、自由は与えられるのではなく、奪いとるのだということだ」

△地球は共通の遺産と強調しているが興味深いのはミゲルグランシアが会合の終りで発言している。彼は言う。英国のアナキストが左翼運動に参加するのは結構だが、一度、左翼が政権に就くと遅かれ早かれ次のアナキストの闘争は対ソシアリスト、コミンニスト、トロツキストになるだろう。特にコミンニストはアナキストの同盟者ではない。彼等は資金をポケットに入れるし受刑者リストだって自分達に都合のいいように作る。

これはロシアの経験を語っているのだろう。

〔新刊案内〕エスベラントに関心のある方はぜひ一読を

『エスベラントとは何か―伊東三郎エスベラント論

集』B6版・一六〇頁・三五〇円（送料一二〇円）

購入ご希望の方は、振替・横浜九一二三（理想閣）、または切手代用にてリベルテールの会・江藤まで。

〔書評〕

大沢正道著『遊戯と労働の弁証法』

紀伊国屋新書、一九七五年

一冊の書物（あるいは一つの論文）は、一人の人間の思想の完結した表現である。そして思想の表現とは、単に客観的な事柄を論理的につなぎ合わせることでなく、主体（著者）と客体（ここでは遊戯と労働という学問的課題）の関係を主体の問題意識から出発して説明することでもある。さて、私は「遊戯」と「労働」の一人の人格における統一が「文化革命」の根本的課題であると考えているので、この本の標題にひかれてさっそく一読したが、「労働は自由の実現の前提であり、遊戯は自由の実現の表明である」という定義や数々の文献を駆使しての遊戯と労働の疎外の形態の叙述など教えられる所がたいへん多かった。にもかかわらず、私は著者の問題意識には大きな疑問と不満を感じざるをえなかったし、ほう大な論述を展開しながらも著者が疎外された労働および遊戯からの解放の展望をどこに求めているのか、明確な解答を見出すことができなかった。

いきなり「マルクスの労働観念の検討」から始まる本文に恐れ入って、著書の問題に取り組む姿勢を知るのに

「あとがき」から読み始めねばならなかった。そこで著者は、戦後二回起った遊戯論ブームから「遊戯問題」はアカデミズムの中で市民権を得たようだが、多くの場合遊戯を労働から切り離してそれ自体についてだけ論じている。そこで遊戯と労働を一つのものとしてとらえる全体化の試みを企て、アカデミズムに一石を投じたという。遊戯と労働を対として考えるべきだとする主張には異存ないが、なぜこのような人間存在の本質に係わる問題をアカデミズムの現状から出発し、マルクスの労働観念から書き始めねばならないのか。また自分の持論の概要も提示せずに、どの方面の「心ある読者の理解を期したい」というのか理解に苦しむ。おそらく著者の顔はアカデミズムに向いており、すでに知識人という「あそび人」の階級に属しているのであろう。また著者は全体革命の理論的課題を追求していると聞かすが、その課題の中には、知識人および官僚の「ことば」と民衆の「ことば」との断絶の問題は含まれていないのだろうか。どうも私にはむずかしい言い回しが多過ぎるようである。

さて内容に関して、私の気付いた大きな問題点の一つは、遊戯および労働の疎外の根本的原因が明確に示されていないため、疎外からの解放への展望がぼやけてしまっていることである。「終章・遊戯と労働の弁証法」

における遊戯・労働の活動の様態の図解入り説明は、どうも子供だましのようにしか思えない。遊戯と労働の相互関係は、著者の行うように抽象的に（存在論的に？）のみ論じられるべきものではない。私の考えでは、労働と遊戯の分解それ自体が疎外をもたらすのではなく、疎外の原因は労働と遊戯の人格的分裂にあるのである。すなわち、遊戯を専らにする人間（魔法使い、軍人など）の出現が民衆から労働と遊戯における主導権を奪い、両者の疎外をもたらしたものである。そこで、現代における労働および遊戯の疎外からの解放の展望は、民衆の一人一人がいかにして、資本家、政治家、官僚、法律家、科学者、技術者、芸術家、知識人等によって独占されている、労働および遊戯における主導権を取り戻すかという点に求められなければならない。

それにしてもこの著書には「あそび」の部分が多過ぎるように思われる。数文の引用の問をぬって著者の意図する所を理解するにはもう一度読み直さねばならない。

（江藤敏和）

ハバクーニンの言葉Vを編みつゝ

初めに安請け合いをして、後でエライ目に合うのは私達の生活でよくあることだが、ハバ言葉Vがそれだ。全集はおろか選集さえ持っていないのに、バクの書きものの中から言葉を選びだして訳を付けている。潜越は言うまでもなく蠚蛇に怯じずである。先日、山本不二夫君の調べで一九二六年上海で出されていたハバ民衆Vを読んだ。バク没後50年記念特集とあり興味深かった。この方はわがハバ労働運動V紙の紹介もあって相当連携関係があったようだ。バクに就ての記事は、今日の水準からみても充分読むに堪えるものだ。こんな言い方は中国人活動家に対し礼を失す事になるだろうか。私の見た所、それは単なるバクに就いての紹介記事や訳に止まらず、その筆者が自分の感性や考えでものを書き、バクの思想のツボを押さえているし、アジ文に終っていないのに好感がもてた。

バクは人も知るように、著作家ではなく機会に応じて意見を述べ、手紙形式や誌紙への投稿という形で書き残している。従って思想につき体系がなく、断片だと言うのが一般の評価だ。むしろマックスストロウに依れば、ハバ神と国家Vハバソシアリズム、連合主義、反教権主義Vハバナーキーと国家Vが比較的主とまったバクの思想書だと言う。私はこれにハバ告白Vハバドイツに於ける反動V

ハ革命家教理問答Vを追加したい。その他にも見過し難い佳品はあるが、例えばハネチャーエフへの手紙Vなど優れ、ハバマルクスVハバ反マツジニVハバマルクスとの個人的関係Vインタナショナル関係文書など捨て難いけど、今度の限られたスペースでどんなものができるか自分でも見当がつかない。人の思想の言葉をあつちから引っぱり、こっちに嚙じりつきと言う具合に寄せ集めるのは好きじゃない。言葉は文脈の中で理解して始めて生きているのであって、フランス革命時代の司法長官フィシェのように三行の文句があれば、誰でもバスチーユ監獄へぶち込めるというように悪用されたのではたまらないと思う。しかし思いなおしてみると、選集は余りに高価で、例え買ったとしても積読で書棚の飾りになるのがオチなら、もしかしてこのバクの手紙でそんな名言があるのか、それなら本文を読んでみようとか、これを機会にバクでも読もうとか、何らかの衝撃が読者諸賢に与えられたら、及ばずながら非力の選・訳者をもって甲斐があると言えよう。しかし先ず最大の恩恵を受けるのは私であって、この機会にバクのものを読む契機が与えられ多くを考えさせられた。古典はそこにあるけど、解釈は読み取る側にあり、情報過多の現状ではそこへなかなかたどりつけないのだとも思い知らされている。

（Y記）